



NPO法人

フキックス・コルプス

NPO法人フキックス・コルプスは葺合高校の教師及び卒業生により設立され、グローバルな人材育成を目的として活動しています。FUKIX NEWS第14号では、2022年3月に葺合高校を卒業後、東京外国語大学国際日本学部に進学し、来春から海上自衛隊に入隊予定の渡辺純矢さんに色々なお話をお伺いしました。

INTERVIEWER:仁木 良流歩 (関西学院大学総合政策学部 2回生・葺合高校国際科2024年3月卒)

「英語」と「日本」を学び、なぜ「海上自衛隊」へ？ — 東京外大で「日本」を見つめ、「公」に貢献する道へ —

「英語は話せる。でも、国際社会で本当に渡り合うには、まず自分の国の文化やルーツを深く知らねばならない」。そんな強い問題意識から、東京外国語大学(東京外大)国際日本学部を選んだ先輩がいます。大学ではワンダーフォーゲル部の部長として仲間と山に挑み、留学生サポートや築地でのツアーガイドでは、海外からの視点を通して「日本のソフトパワー」の凄みを肌で感じてきたそうです。

グローバルな交流の最前線にいた彼が、なぜキャリアとして「海上自衛隊」という国防の道を選んだのでしょうか。一見、正反対にも思えるその決断の裏には、多くの出会いと学びの中で彼が見つけた「守るべきもの」と、「誰かのために生きる」という強い覚悟がありました。たくさんの出会いと経験があった大学生活を経て彼がたどり着いた答えと、高校生への熱いメッセージを皆さんにお届けします！



■「外国語大学」で、あえて「国際日本学部」を選んだ理由は何ですか？

高校時代は皆さんと同じように、国際科で英語漬けの日々を送っていました。グローバルな視点を学ぶ機会には恵まれていたのですが、ある時、ふと「自分は英語は話せるけれど、肝心の『日本のこと』をどれだけ深く理解し、自分の言葉で世界に説明できるだろうか？」という大きな疑問に突き当たりました。ちょうどその頃、藤原正彦さんの著書『祖国とは国語』を読み、大きな衝撃を受けました。そこには「国際社会で真に活躍するためには、ただ英語が流暢に話せるだけでは不十分である。自分の国の文化や歴史、そのルーツとなる思想を深く理解した上で発信できてこそ、初めて対等な対話ができる」といった趣旨のことが書かれていました。その言葉に強く共感し、「まずは自分の足元である日本を知らなければならない」と決意しました。そこで、これまでの英語学習を継続しつつ、その土台となる日本文化や社会について専門的に深く学べる環境を求め、東京外国語大学の国際日本学部を選びました。



■ 留学生サポートやツアーガイドの経験について教えてください。

大学では「バディ」という制度を利用し、イタリア、台湾、インドネシア、ブルガリアからの留学生の生活サポートを行いました。また、学外では築地で外国人観光客向けのツアーガイドのアルバイトも経験しました。そこで驚いたのは、彼らが想像以上に日本のアニメやJ-POPといったポップカルチャーに詳しく、強い関心とリスペクトを持ってきていたことです。彼らと接する中で、「日本の礼儀正しさは素晴らしい」「この食文化は美しい」といった生の賞賛の声を直接聞くことができました。外からの視点に触れることで、「日本はこれほどまでに人を惹きつける『ソフトパワー』を持っているんだ」と、自国の強さを再認識させられました。それと同時に、「この素晴らしい文化や秩序、先人たちが築いてきたものは、私たちが誇りを持ち、未来へ守っていかなければならないものだ」という強い使命感が芽生えるきっかけとなりました。

■ 世の中には様々な仕事がある中で、なぜ「海上自衛隊」を選んだのですか？

一番の理由は、自分の「生き方」を決めたからです。私は、先祖や家族、大切な人、友人、そして支えてくださった多くの方々を含む「まわり」のおかげで、これまで幸せに生きてこられました。次は自分がその「まわり」を支えたい。私にとっての「まわり」とは、すなわち「日本」です。だから、日本のために生きる道を選びました。また、大学での研究(卒論対象の三島由紀夫など)を通じ、「自己犠牲」という価値観を大切にするようになりました。その究極は「何かのために命をかける」こと。自衛隊の宣誓にある「事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂に務め、もつて国民の負託にこたえる」という言葉が、自分の求めていた覚悟と重なり、入隊を決心しました。

その中で特に「海上」を選んだのは、海上自衛隊が「外交」の一翼も担っているからです。軍艦による他国への訪問は「砲艦外交」とも呼ばれ、国際親善や抑止力として重要な役割を果たします。外大で培った語学力や国際感覚を活かし、将来は防衛駐在官や練習艦隊の活動を通じて、防衛のみならず外交の面からも日本に貢献したいと考えています。

(来年の私の生活が気になる方は、「江田島の青春」とYouTubeで検索していただくと、とても楽しい動画を見ることができます！)

■ 最後に、葺合生へのメッセージをお願いします。

高校生のみなさんに伝えたいことは、私も道半ばですが、自分のルーツを積極的に知ろうとし、考えてほしい、ということです。例えば、おじいちゃん、おばあちゃんに、自分のご先祖様について聞く、といったことです。どうい歴史があって今の自分が存在するのか、ということを知って初めて、自分の位置やすべきことが見えてくるかもしれません。そして、何より、内から込み上げてくる感情に逆らわず、むしろその想いを力に突き進んでほしいということです。これは、元社会学者の宮台真司氏が言っていることで、私自身も「この人たちから恩を受けた」という想い、「この人すごい」、「この人みたいになりたい」という想いから、ここまで進んできました。この内から湧き上がる力があれば、生きづらい世の中でもぶれることなく、力強く進めると思います。

そのためには、普段とは違う環境に身を置く、といった大小問わず様々な経験をし、自分の感情の変化に敏感になることが大切です。高校生のみなさんは、大学受験という大きな関門が待ち受けていると思いますが、辛抱強く耐え、いつかそのような想いが芽生えることを願っています。



—高校生へのメッセージ—

■ 高校生のうちにやっておくと良いことは何ですか？
課題研究です。私自身、1年生の時は「自己肯定感」、2年生の時は「創造性教育」についての研究に取り組み、関西学院大学のリサーチフェアや全国高校生フォーラムに出場した経験もありました。その過程で、ものの見方や考え方、そしてそれを他者に伝える力を養うことができましたし、英語力も鍛えられました。課題研究をやっておいた方が良い理由としては、ものの考え方や、「どういう風にロジックを構築していくか」を学べる点にあります。特に課題研究では、「現状分析」から「原因究明」、そして「解決策の提案」という一連のロジックを組み立てる必要があります。その意味で、課題研究を通してこの思考プロセスを学び、大学に入る前に身につけておくことは、将来にとって損がない、非常に価値のある経験だと思います。

■ 大学で印象に残っている学びはありますか？
哲学の授業です。哲学には、ロジック(論理)に通ずる部分があると感じています。例えば、「どのような論理構成で立論するか」といった点です。今まで気づかなかった「世界はこうなっているんだ！」とか、「この哲学者は世界をこういう風に見ているんだ！」という新しい視点を得られたことが、純粋に面白かったですね。こうした学びが、すぐに直接何かの役に立つわけではないかもしれませんが、ですがこうした多様な「フレームワーク(物事の捉え方)」を知っておくことは、いつか困った時にきっと役立つと思います。大学に入ったら、こうした分野を少しかじってみるのも面白いかもしれませんよ！

■ 進路に悩むときにどのように物事を考えればよいですか？

まずお伝えしたいのは、将来のことについてあまり慎重になりすぎたり、焦ったりしなくても大丈夫だということです。高校生の皆さんは今、大学受験という大きな壁を前にプレッシャーを感じているかもしれませんが、しかし、大学合格は決してゴールではなく、人生の長い道のりの中の「一つの通過点」でしかありません。その先も人生は長く続いていきます。

私自身、将来の進路が明確に決まったのは、大学3年の時でした。それまでは進路に悩み、時には少し落ち込んだりもしましたが、ある日偶然見たドキュメンタリー動画に衝撃を受け、道が開けました。

こうした「偶然の幸運な出会い」を「セレンディピティ」と呼びますが、ただ待っているだけではその幸運は掴めません。そうした出会いを逃さないためには、普段からアンテナを張り、いつもと違う本を読んだり、映画を見たりして、色々な世界に触れてみるのが大切です。

そうやって感度を高めておけば、いつか自分の心が反応する瞬間が必ず訪れます。あまり気負わずに、今できる目の前のことに取り組みながら、自分の心が「ビビッとくる瞬間」を待ってみてください。